

Newsletter

OCTOBER 2000

<http://www.aack.or.jp>

目次

山岳研究	新日本オートルート	高尾文雄	1
教育的登山論シリーズ	第二章 登山必携十品	中島道郎	7
随想	ベック・ウエザーズ教授に会ったこと	伊藤寿男	7
お知らせ	林一彦さんの追悼集	原稿執筆の依頼	9
		平井一正	9
新会員自己紹介	古瀬駿介		10
山とローソク二題	清水節男		10
訃報			12
編集記			12

新・日本オートルート

高尾 文雄

山スキールート図集を見ると、日本オートルートとして立山、槍のスキー縦走が出ています。このコースではスキーを使える範囲は限られていて、滑走距離が少なくない。そこで、自分なりにスキーの滑降を重視した、オリジナナルなルートを考え出そうと思った。最近では本場のオートルートにも興味が出て、ルートを調べたり、行った人に様子を聞いたりしていたのでこれもルート造りの参考となった。

地形図をよく見て検討を重ね、スキーを最大限に使える新・日本オートルートと名付けた。ルートはおおむね谷と谷を峠で結び、稜線を縫うようにしてスキーで上り下りする。

九六年、九七年、九九年、二〇〇〇年の四回に分けて行ったが、(一)立山、(二)北ノ俣、(三)北ノ俣、(四)唐松、(五)針ノ木である。

ルート中の大滑降のポイントは(一)では御山谷、廊下沢、薬師沢、北ノ俣西斜面、(二)では赤木沢、黒部五郎のカール、双六谷、蒲田川左俣、槍沢、(三)では御前谷、西

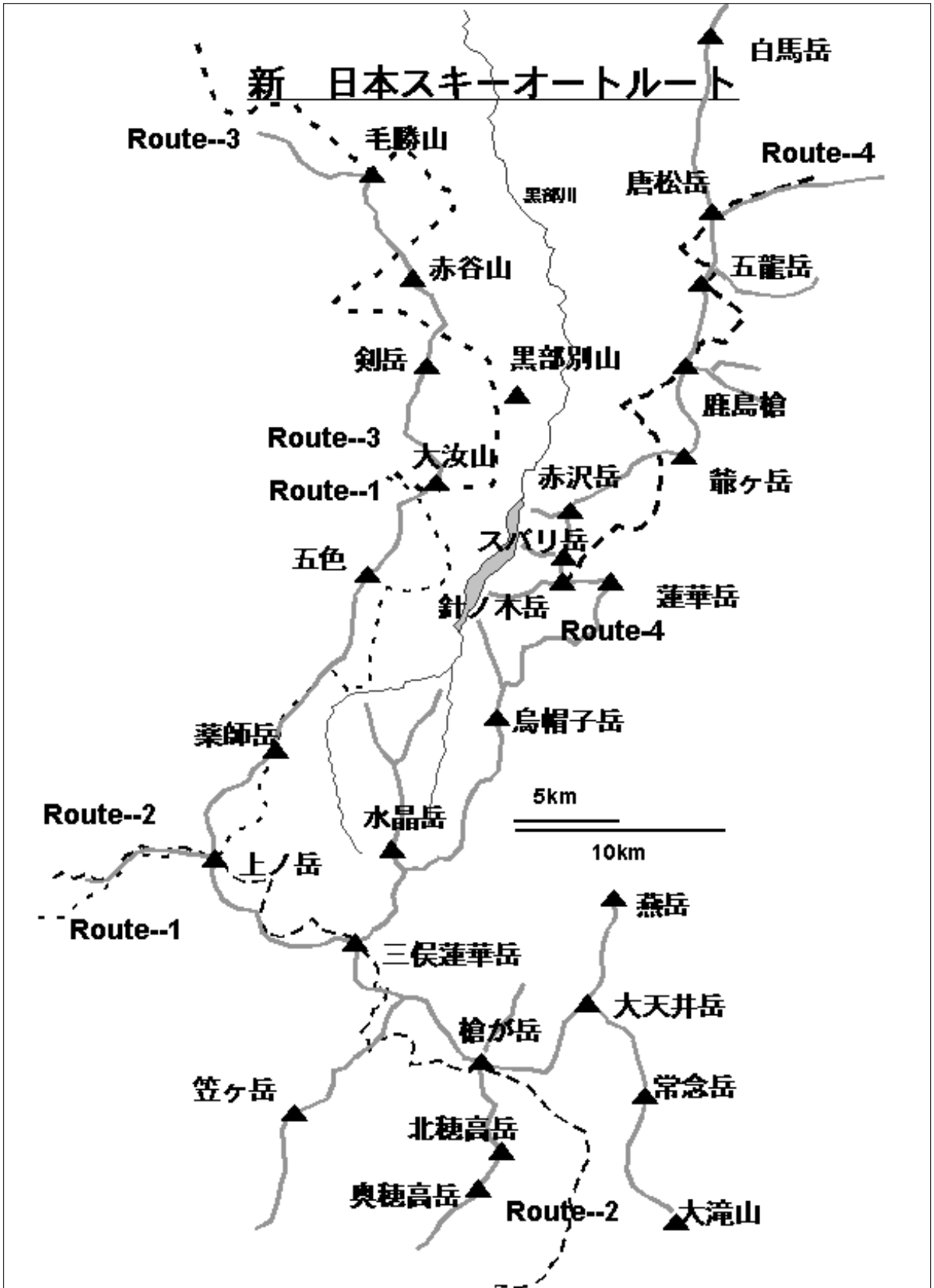
仙人谷、折尾谷、東又谷、(四)ではシラタケ沢、コヤウラ沢、扇沢、針ノ木雪渓である。このうち、黒部側の谷にはあまり人が入らないので、自分たちの滑りが満喫できるであろう。

(一)～(四)ともに山行全体を通して特殊な技術を要求されることはないが、雪質によりスキーの滑降技術はかなり高いレベルが必要だ。すばやく、転ばずに重荷を背負って滑れる技術が必要となる。当然メンバの足並みがそろっていることが重要である。ルート全体のポリウムがあるので、個々の谷の困難さだけで判断できないところがあり、そこがまたこういったスキー縦走の魅力でもある。

時期は総合的に見て、五月の連休あたりがベストであろう。天気が安定していないと、どのルートもなかなか貫徹するのは難しい。谷底へ毎日降りては登り直すことになるので先々までの天気の見極めが重要となる。

これらのルートの取り方、選び方はまだほんの一例に過ぎず、まだまだ色々と考え、オリジナリティーを出して新たなルートを造って行きたい。ルート造りに注意している点は

一、朝一番の滑降は避けた方が無



難。クラストしている場合が多く危険。

二、午後遅い滑降も避けた方がいい。雪がブレーカブル・クラストになることが多い。

三、谷沿いのルートが多いので、雪崩には細心の注意と事前の学習、ピーコン等の装備の携帯が必要。(五月でも大雪は降る)

四、年により積雪状態がかなり違う。特に谷筋は割れていることもあるので注意が必要。

五、上からのブロック、落石等にも注意が必要で、テント地には安全な場所を選び、危険地帯を登る場合は朝早く通過する。

最後に今後可能性のあるバリエーションルートについてであるが、夢のようなルートも含め、色々と考えている。

・黒部川の横断で後立山と立山側をスキーで結ぶ。

・北アルプス以外の山域で同様なルート取りを考える。

(例えば、笹ヶ峰ヒュッテ周辺では九三年に次のようなスキーを山田ポール君達と行った。

小谷温泉→天狗原山→金山沢滑降→裏金山→焼山→北面台地滑降→水無谷→海谷滑降→昼蘭山→昼蘭谷滑降→焼山温泉)

山スキーはまだまだ色々な可能性を秘めているので、オリジナリティーのあるルート造りにトライしていきたい。

踏査記録

(一) 立山→薬師→北ノ俣

室堂から入山する。一ノ越まではシールで登る。一ノ越からは御山谷を滑る。標高一八〇〇メートル地点まで滑るが、重荷のため普段の滑りができないので注意が必要。

右岸の尾根に一ノ越から見ると窓のように見えるコルへシールで登り返す。その標高二〇五六メートルのコルから中の谷へ滑り込む。少し急だがデブリもなく快適に滑れる。

今度は中の谷から刈安峠まで登り返す。急で、斜面の上部の雪面は亀裂が入っていて今にも崩れそうに見える。スキーは担いで登る。刈安峠からの尾根はヤせていてシールでは歩きづらい。途中でスキーを担ぐことになる。

五色ヶ原の手前の標高二一〇〇メートルまで登ると尾根は広くなりテント適地がある。この辺が樹林限界であるので一日目はこの辺りで泊まることになる。

ガスが出たり、風が吹いたりするとかかなり苦勞するところだ。標高も高く早朝は雪面が堅くクラストする。スキーを担いでアイゼンをつけて登ることになる。五色ヶ原の東端辺りから又クイ谷へ滑り降りるのがよい。又クイ谷までは無木立の広い斜面で、傾斜もありすばらしい。クラストしているとかかなり緊張するが大変快適な滑降を堪能できる。

又クイ谷に降りてから越中沢岳の東にシールで登り返し、標高二四〇八メートルのピークのすぐ横に出て黒部側を覗き込むと黒部川の出合まで一直線に見渡せる。

ピークから廊下沢へ滑り込む。廊下沢の上部は急だが、広いカール状ですごく気持ちの良い滑りを楽しめた。扇の要のようになっているところまで滑ると、そこからはU字谷の様になっている。左右からの落石が少し気になるが、一気に黒部川まで滑れる。

大黒部はこの時期でも悠々と流れている。左岸の雪面をシールで進めるが、スゴ沢の手前で行き詰まる。右岸へスノーブリッジを渡らなければならない。

スゴ沢当面の中ノタル沢との出合いは沢が広くなっていて、デブリの跡が台地状となっていて暮営できる。

三日目はスゴ沢を主稜線まで登る。黒部川との出合い付近は兩岸が迫っており、落石、ブロックが恐い。すばやく通り過ぎるようにする。その上の滝は埋まっていて問題ない。そこから上は明るく開けていた。二俣はどちらでも登れるが、主稜線上の雪庇の崩壊には注意が必要。出合いから主稜線までシールで登れる。

主稜線はこれまでと違い多くのトレースがある。薬師岳までは巨大な雪庇の上をシールで登れる。

薬師岳のピークからは薬師沢右俣を滑る。上部はクラストしているが、広大なスロープを快調に滑走できる。全員が横一列に並んで滑れるほどだ。しかもシユプールはほとんどない。快適な大滑降である。

薬師沢の本流に近くなると、左右が高くなって狭くなると沢が割れだす。左右に高巻き

すれば、薬師沢本流との出会いまで滑れる。この辺りも幕営適地である。

北ノ俣岳までは薬師沢左俣と本流の間の尾根をシールで登る。北ノ俣からの滑降は真っ白な大斜面となっていて、風も強くシユカラとクラストが交互に出てきて苦勞させられる。風が弱くなる所まで降りれば、快適な滑降となりどこでも滑れる。

寺地山は登り返しても南側を巻いてもよい。寺地山から樹林の尾根を再び滑るが、はじめは傾斜がなくて進まない。途中からはスピードも上がり、沢底まで一気に降りる。夏道通りに峠に登り返し、最後の急な斜面を沢通しに降りると林道に出会う頃雪が消えスキーを脱ぐ。

トータルの滑走標高差は、五〇〇〇メートルとなる。

(二) 北ノ俣、黒部五郎岳、槍ヶ岳

神岡鉄道の終点の奥飛騨温泉口でタクシーを予約しておき、有峰へ続くスーパー林道を行ける所まで入る。雪が少ないと、打保からずいぶん上の有峰に通じるトンネルの手前まで行ける。

トンネルまで林道を歩き、脇から寺地山への尾根に取り付く。寺地山の先にある避難小屋までは樹林の中を進む。雪が少ないと木がじゃまでなかなか進まない。

避難小屋からは急に開けるので、大斜面をシールで斜登行すれば、ピッチが上がる。

北ノ俣からは反対側の赤木平に滑り降り

る。夏はお花畑になる広大な斜面で、どこまでも斜滑降ができる。赤木平まで滑ると、どこでもテントが張れる。

朝は冷え込み雪面が堅くクラストする。赤木平から赤木沢經由黒部本流を目指して滑り降りる。赤木平からの滑降は非常に快適。傾斜は有るが、斜面は広い。

周りの尾根は樹林が濃くてスキーでは下りられないので、赤木沢の沢底に降りる。雪が割れるが、高巻きを繰り返しながら滑り、標高二一〇〇メートルの所で右岸から入る支沢を使ってウマ沢との間の尾根に登り返す。滑落すればクレパスから水没するので注意して滑る。

赤木沢とウマ沢の間の尾根は緩やかでシールを使える。黒部五郎へ続く主稜線に出ると堅くクラストしているのでスキーを担ぐ。

黒部五郎の頂上からは、カールに滑り込む。雪崩には注意が必要だが、快適な滑降を楽しむ。小屋の方には行かず、五郎沢の左俣が出合うところまで滑り、三俣蓮華岳に向けて登り直す。

稜線を三俣蓮華のピークまで登り、縦沢の上部に滑り込む。出だしは急で緊張するが、すぐに緩くなり快適にターンできる。しばらく滑って、双六岳の方へトラバースに移る。途中雪崩れそうな急斜面があるので、雪が悪いと横切るのは危険。縦沢源流にはテントサイトが多い。

主稜線に向かって登ると双六岳の下に出る(標高二六五〇メートル)。双六小屋まで、滑

降する。双六小屋から双六沢を滑降する。この辺りはシユプールがいっぱいある。

標高二一五〇メートルまで滑って大ノマ乗越まで登り返す。大ノマ乗越から弓折岳まで更に登り、頂上から蒲田川左俣へ滑り降りるのだが、雪庇があり、下が急斜面で入れない。秩父沢の方に少し降りてから左に回り込んで小尾根を越え左俣谷に入る方がよい。

雪は重くなるが大斜面を快適にターンして左俣谷の沢底に降りられる。左俣谷は雪が割れていて、対岸にはなかなか渡れない。時々雪が切れていて藪こぎを強いられる。左俣谷から槍へ登るには水鉛谷を使い、中崎尾根を越えて右俣谷へ入る。

水鉛谷はブロック雪崩が怖いので早朝にすばやく登った方がよい。水鉛谷は両岸が雪崩で磨かれた急な岩壁でゴルジュになっている。沢底はデブリだらけで非常に歩きにくい。中崎尾根のすぐ手前まで登ると急に開けて傾斜のない広場のような所に出る。ここはテント地にできそう。

中崎尾根は簡単に越えられる。飛騨沢に入ればあとはただ登るだけである。強い風が吹く中を肩の小屋まで登る。

肩の小屋からは槍沢を滑るが、状況によってはクラストしているので注意が必要。快適な大斜面にシユプールを描いてフィナーレを飾る。

年によって雪の多少があり、どこまで滑れるかは変わる。雪がなくなったら後はスキーを担いで上高地までひたすら歩く。

トータル滑走標高差は、四二〇〇メートルとなる。

(三) 立山、剣岳北方、毛勝山

室堂から入山する。一ノ越まではシール、一ノ越からはスキーを担ぎ、重荷にあえぎながら雄山に登る。

雄山神社の直下から御前谷を滑り降りる。御前谷は滑る人はほとんど無いが、広く傾斜も急で大変すばらしい。年によっては五月でも新雪が残っていることもあり素晴らしいスキーができる。雪が悪ければ出だしが急なので苦労する。御前谷は周りに高くそびえる岩峰が望まれ、日本離れした景色である。

御前谷を途中で左の尾根(立山中央山稜)を越えて内蔵助谷に移り更に滑り降りる。内蔵助平まで滑るとテントはどこでも張れる。人もいなくて静かな山を満喫できる。

ハシゴ谷乗越に登り、剣沢まで滑る。二股までは年によっては、沢を渡るのが苦労するときもある。

二股からは大窓へのツアーの人は多いが、小窓谷に登る人はほとんどいない。小窓谷はシールで最後まで登れる。

小窓から反対の西仙人谷に入る。出だしは雪が無く、少し歩いて下りてからスキーを付ける。上部は大変急で緊張する。ジャンプターンで慎重に滑り降りる。急で狭く喉のようなどころが続く。左右は高い岸壁で日本離れした景色の中を滑る。

途中からはデブリが谷が埋め尽くしているの

で、スキーを外さないといけない。

白萩川の大窓からのルートに合流したら、傾斜は急に落ち、雪が重いが気楽に滑れる。年によっては、池ノ谷出合付近から取り入れ口まで渡渉強いられるところがある。

取り入れ口からは雪もなくなり、スキーを担いで林道をブナクラ沢の出合まで行く。

こんどはブナクラ沢に登る。ブナクラ沢の取り入れ口の上からは雪も続いており、シールを使う。この時期のブナクラ沢はたくさん人が入っている。谷はデブリがいっぱいで、歩きにくい。

一三〇〇メートル付近まで登ると沢が開けてテント適地となる。ブナクラ乗越までシールで登れる。

裏側の折尾谷はスキーで下るのに絶好の谷。広くて見通しが利き、デブリもなく傾斜もスキーにちょうど良い。一気に下れるが、標高九〇〇メートルからは雪が無くスキーを担いでのヤブこぎとなる。

雪を拾いながら段丘状になった左岸を高巻く。小黒部谷本流まで降りずに、西谷と中谷が別れる手前まで藪の中をトラバースする。その辺りで段丘は終わり急斜面となつている。段丘の切れ目の急斜面を強引に下りて、更に落石地帯をトラバースして中谷のゴルジュをやり過ごす雪の上を下りられる。

すぐ先で沢が分かれるので、西谷に入りシールで登る。遠くには熊やカモシカも見える。デブリの斜面をひたすら登ると、上部の喉のようになつた急斜面はスキーを担いでアイゼ

ンで登る。

平杭コルに上がる手前は巨大雪庇があり、ピッケルを取り出し弱点を見つけないながら登る。このコルもテントが張れる。

北方稜線の長い雪面を毛勝山に指してスキーを担いで登る。頂上直下の急斜面はスキーを担いでいると苦しい。

頂上からは東又谷を滑る。広い中斜面はスキーに絶好である。途中のゴルジュも中を行け、滝も横を簡単に下れる。

堰堤に出会うところまで来ると、雪もときれとぎれになり渡渉する事になる。標高八四〇メートルまで来ると、さすがにスキーでは下れなくなり、林道を歩いて下山する。

トータル滑走標高差は、五六〇〇メートルとなる。

(四) 唐松、鹿島槍、針ノ木

八方スキー場のゴンドラを使って入山する。大勢の登山者と一緒に朝一番にゴンドラとリフト二本を乗り継ぎ、八方山荘からシールを付けて歩き出す。唐松に近づくとつれ根がやせてくるので、最後の一段りだけスキーを担げば唐松小屋に着く。唐松岳を空荷で往復した後、小屋の裏から餓鬼谷左俣へ滑り込む。

小屋裏の斜面は広く、大きな斜滑降もできるがガスが出れば何も目標となる物が無い。途中から谷が深くなり、岩も出てくる。左右からのデブリに注意が必要。今にも落ちそうな雪庇が出ている。急に谷が開けると、右俣

との出合である。小高くなった台地はテント地になる。

五竜山荘に突き上げる餓鬼谷右俣はゴルジュ状になっていて、左右からのブロックから逃げられない。少し左俣を戻って白岳に突き上げる広い枝沢の方が登りやすい。稜線直下までシールであがれる。稜線からはトレースに沿って白岳から五竜山荘までスキーを担いで歩く。

五竜山荘の裏からシラタケ沢に滑り込む。シラタケ沢は上部が大きく開けていて大変気持ちの良い斜面が続いている。遮る物は何もなく、傾斜も適度。左には遠見尾根を行くたくさんの人を見、右には五龍東面の圧倒的な岩稜を見ながら快適に飛ばせる。途中五龍東面からのすごいデブリが谷を埋め尽くすようになると、滑走面に雪が張り付き滑りづらくなってくる。

それでもカクネ里出合までは自在に滑りを堪能できる。シールを付けてカクネ里を登る。カクネ里は広く、正面には鹿島槍の北壁が間近に迫って見え、大変素晴らしい景色である。スキーで後立山の主稜線に上がり鹿島槍を指すのであるが、どの沢から上がるかがポイント。

一番右奥のキレット沢はデブリで埋め尽くされていて、左からのブロック落下が怖い。傾斜もそこそこで登りやすい。素早く、あまり休まずに稜線まで上がる。初めはシールでも行けるが、途中からはスキーを担いで登る。稜線に上がると反対側の正面に剣が見え

る。やはり主稜線は人の往来が激しい。スキーを担いでアイゼンを付け、片手にピッケルも一方にストックを持ち歩く。スキーは引つかかって邪魔になり、兼用靴は歩きにくいので歩くペースが極端に落ちる。

八峰キレットの最低鞍部への下りで一ヶ所懸垂下降をしないといけない所がある。そのほかも鎖を振り出したり、後ろ向きになって降りたりと結構苦勞の連続となる。鹿島北峰の手前の稜線上に良いテント地がある。

鹿島の北峰を越え、本峰に上がると、頂上からすぐ滑り降りられる。鹿島槍から棒小屋沢までの斜面は今山行のハイライトである。すぐ横を縦走している人がこちらが滑り出すのを見ている。

斜面は広く雪質も程良いクラスト。遮るものが何もない大斜面にシュプールが次々刻まれていく。これぞ山スキーの至福の時である。斜面は途中から沢に吸収されたが、滝などで途切れることなく棒小屋沢まで続いている。棒小屋沢に出合くと、一部沢が割れ水を汲める。

棒小屋沢からはシールを付けて登り、右俣に入る。途中から谷がゴルジュ状になり滝のようになっているので、滝の手前で右岸の斜面をジグザグに切って尾根まで上がる。上がった尾根は緩やかに種池まで続いている。

種池からはシュプールがたくさんある。かなりの急斜面が続くが南斜面なので雪は軟らかい。爺側よりも種池寄りに滑った方が斜面は開けていて大きくターンが出来る。ほとんど

ん滑って行くと堰堤がでてくる。いよいよ終わりが近い。右岸に工事道路ができてそれと辿ると扇沢駅からの自動車道にでる。扇沢駅までは車道を歩く。

針ノ木へは扇沢駅から針ノ木雪渓を空荷で上がる。針ノ木峠に上がるルートから分かれヤマクボ沢に入り、頂上を目指す。左肩に上がって、シールからツボ足に代えて頂上まで上がる。

頂上からは往路を滑らず、まっすぐヤマクボ沢に滑り込んだ方がいい。かなりの急斜面だが、空荷であれば難しくはない。途中で雪が悪くなるが、傾斜も落ち問題にはならず扇沢駅まで滑れる。長い山行のフィナーレを飾る良い滑りが楽しめる。

トータル滑走標高差は五五〇〇メートルとなる。

以上

(平成二二年八月一六日受理)

教育的登山論シリーズ

中島道郎

第二章 登山必携十品

この『登山必携十品』というのは、アメリカのシアトル市に本拠を置く『ザマウンテンニアーズ』という登山団体が発行している小冊子です。なかなか良いことを書いていますので、そのサワリのところををご紹介します。興味のある人は是非原書を読んで下さい。私がついているのはもうかなり古くなりました。最新版を取り寄せないといけませんね。

(THE TEN ESSENTIALS For Travel in the Outdoors, The Mountaineers, Seattle, 一九九三)

(一) 懐中電灯ノヘッドランプ 焦点調節が出来、かつ防水式のもの。鉢巻きに工夫を施して、棒状電灯を装着すればヘッドランプになる型が便利。アルカリ電池は長命なのでよく使われているが低温に弱いので注意。

(二) 地図 目的地とその周辺のもの。防水ケースに納める。

(三) 磁石 使用方法によく習熟しておく。

(四) 予備食 悪天、道迷い、怪我、その他の理由で予定が遅れる場合に備えて、食料は一日分余計に持参する。軽くて、そのまますぐ食べられて、保存のきくもの(飴、カオリーマイト、乾パン、チョコレート、甘納豆、

干果物、ナッツ等)。燃料・調理用具を携帯する場合は、インスタントラーメン、粉末スープレ、ココア、紅茶などもいい。

(五) 予備衣料品 この度の山行で考えられる最悪の事態を生き延びる為には何が必要か?を考えて準備する。最低限、肌着の着替えと防風ヤッケは欠かせないが、登る山と季節に応じて、手袋、靴下、帽子、スエーター、シャツ、羽毛服などの用意も必要となる。山中で夜を明かす場合は、まず汗で濡れた肌着や靴下を脱いで新しいものに替え、スエーター、羽毛服などの防寒着を重ねる。雨よけに大きなビニールごみ袋を用意すると便利。但し酸欠に注意。冬期登山にはツェルトザックは必携である。

(六) サングラス 山では紫外線は予想以上に強く(海拔三〇〇メートルで海面上の一・五倍)、またそれは曇りでも弱められないから決して油断しないこと。特に雪の上では、サングラスをしていないと必ず雪目に行われる。グラスの色は、灰色か緑色だと景色が自然色に近く見え、黄色だと曇りの時にものが見やすい。色の濃さは鏡に映して自分の目が見えない程度を選ぶ。予備は必ず用意のこと。

(七) 救急医療キット これさえあれば大丈夫、といったものではなく、単なる急場凌ぎに過ぎないことをしっかり銘記しておく。個人装備として、各人最低、バンドエイド数枚、サージカルテープ大小各一巻、ガーゼパツク大小数個、包帯大小各一巻、イソジン消

毒薬十三リットル一瓶、アスピリン錠六錠くらいは用意する。その上は、個人の好み、医学知識、登山の形態・規模・季節に応じて適当に加減する。それらは、防水性で丈夫でこぢんまりした容器にまとめる。

(八) ポケットナイフ 大小二枚の刃、缶切り、ねじ回し、コルク栓抜き、鋏、錐、の付いたいわゆる七徳ナイフ(スイスアーミーナイフ)。紐に結んでベルトに通すとか首から下げるなどして、無くしない工夫が必要。

(九) マッチ 飲食店の広告マッチ、或は百円ライターで知られるブタンライターでもよい。これをビニール袋に包む。

(十) 火付け 焚き火の着火には不可欠。乾いた新聞紙、蠟燭とか固形燃料等。後者は、その上に金属食器をかざすと、茶、スープなどの暖かい飲み物が作れ、応用範囲が広い。

ベック・ウエザーズ教授に会ったこと

伊藤 寿男

ベック・ウエザーズ教授をご承知だろうか。例の一九九六年五月のエベレスト大量遭難の時、サウスコルにおいて二度にわたって仲間に見捨てられ、翌日自力でサウスコルのテントに辛うじて辿り着き生還した男である。この男に思いがけない場で会ったので、披露したい。

六月末 BOMA (Building Owners and

Managers Association) の総会がサン・テイ
エゴで開催され私も日本のデレゲーション
の一員として参加した。私は知らなかつた
が、この総会のオープニング昼食会の目玉
として彼の講演が設定されていたのである。

講演の内容は私のヒアリング能力不足も
あり完全には理解できなかったが、既に読
んでいた本(「空へ」 文芸春秋社、
「EVEREST」 National Geographic社)、そ
の他の記録などから補足するとおおよそ次
のようなことを話していた。

一九九六年五月十日未明、快晴の絶好の
アタック日和の下、サウスコルよりロブ・
ホール隊長に率いられた公募登山隊六名が
エベレスト頂上を目指した。

他にも数パーティーが同時に頂上を目指し
ており、ルート待ち、体調の好不調、技術
の差などありバラバラになりながら、日本
人女性難波康子を含むパーティーのうち三
人がどうにか頂上を踏んだ。

午後三時過ぎより突然天候が急変しサウ
スコル上の第四キャンプへの下降は、強風
雪、視界ゼロの中で難渋を極めた。全員チ
リチリになったが、ベック・ウエザースと
難波康子の二人は、他のパーティーの疲労困
憊の連中と合流して烈風吹きすざぶサウス
コルになんとか降り立った。しかし猛烈な
ブリザードでテントの位置がわからず、遂
に彼らは力尽き動けなくなってしまうた。
第四テントからほんの一五〇分の地点
である。

別の公募隊のガイドであるロシア人ブク
レーエフ(超人的な体力の持ち主。その時
全力を尽くして救助しなかつたと非難され、
後日「デスゾーン八八四メートル」(角川
書店)で反論している。翌年アンナブルナ
で遭難死した)は、その夜二度にわたり単
身で捜索に赴き、二度目に雪上にへたりこ
んでいる弱者グループを見つけた。この時
点でブクレーエフはベック・ウエザースと
難波康子の二人は死んでいるとみて、彼の
パーティーのメンバー二人をひとりづつ二往
復してテントに連れ帰った。

翌朝ブクレーエフの話を聞いて、ボブ・
ホール隊のメンバーが老練シエルパを連れ
て残された二人を確認に行つたところ、両
手両足を突き出し雪に覆われている二人を
見つけた。顔面に張り付いた氷を剥がすと
驚いたことにまだ二人は生きていた。しか
しもう虫の息であり、「他の多数の生存者を
無事に下ろすために二人は神の手に委ねよ
う」と言う老練シエルパの意見に従って断
腸の思いでテントに戻った。ブリザードは
一日中続き、生存者達はサウスコルのテン
トに閉じこめられていた。その日の夕方、
ゾンビの如きベック・ウエザースが独力で
テントに辿り着いたのである。

昨年の正月であつたが、偶然つけたテレ
ビの画面に、水泳パンツ姿の男が透明な水
槽の中で腹まで水に漬かつて、水流の中を
懸命になつて歩行訓練を行っているのが映
し出された。ウエザースであつた。右手は

義手、顔は凍傷でひきつれ、鼻には丁度ソ
ーページのとき肉塊がぶら下がっていた。
尻の肉を移植したのである。「このインタビ
ューで難波康子の話になると彼は絶句し泣
き出した。私はエベレスト登頂の大きな代
償を痛感し、うちひしがれた彼のことが妙
に印象に残っていた。

広い会場の中で彼はスポットライトを浴
びて丸々二時間、舞台中を動き回つて汗み
ずくで講演した。彼の鼻は見事に整形され
胸板も厚く、かつて「で」で見たうちひしがれ
た様子は全く感じられずむしろ生気が漲つ
ていた。

何回も難波康子の名前が登場した。すが
りついた彼女の手の力が次第になくなって
いくのを思い出すとか、救つてやれなかつ
たことに自責の念耐え難い等々切々と訴え
た。最初ざわめいていた会場も最後にはし
んとして聞き入つていた。講演が終わる
と万雷の拍手が鳴り止まなかつた。

私は舞台近くに座つていたので舞台を
降りてきた彼に握手を求め、あらまし次の
ことを言つて彼を称えた。

一 難波康子を最後まで面倒見てくれた
ことに日本人として感謝する

二 強靱な体力と不屈の精神力に敬意を
表す

三 二度に亘つて仲間に見捨てられたに
も拘わらず何の恨みすらも公式の場で表
明していないのは立派である

彼は義手の右手と指のない左手で固く私

を抱き、よく言ってくれたと何回も謝意を表したのだった。

後刻、彼の著書のサイン会があった。所用を済ませて私が駆けつけたときには、本の在庫が尽きサイン会は終了したところであった。その場に残っていた彼に後日サインして送ってもらうことにした。帰国後事務局から「確かに承っている。出版社から入手次第送付する」との来信があった。

本の題名は「Left for Dead」、入手を楽しみに待っていると云うのである。

(参考)

一 遭難時の状況は「Into Thin Air」邦訳「空へ」(文芸春秋社)に詳しい。著者はアウトドア雑誌社から顧客の一員として本公募隊に派遣された。山のベテランであるだけにドキュメンタリーレポートとして大変面白い。

二 この時期ロブ・ホール隊のほかに、同じく公募隊で彼の親友のエド・フィッシャー隊、MAX隊、南アフリカ隊、台湾隊、など数パーティーがBCに入っていた。同時期、ノースコル・ルートには日本の九州隊、インド隊も入っており、インド隊に九州隊が非難されたケースはご記憶の方もおられるだろう。(後にインド隊の誤解であったと判明した)

三 IMAX隊の撮影した映画がIMAX方式で後日公開され見に行った。巨大画面(縦方向に長かったような気がする)に映し出されるエベレストに圧倒されたが、同時に、

体力も酸素も残っているにもかかわらず、公募客のためにサウスピークに残りそのまま死に至ったロブ・ホール隊長と、BCとの電話による生々しい対話がオンエアされ印象に残った。BCの呼びかけに酸素もなくなり次第に弱っていくロブ・ホールの声、二の発達によって、ニユージランドに残された身重な夫人と直接交わされた最後の会話などがそのまま放映されインパクトの強い映画であった。

四 IMAX社の撮った写真は、National Geographic社より「EVEREST Mountain without mercy」として発刊された。大量遭難事件も触れられており遭難死した台湾隊メンバーの遺体など生々しく写っている。(九月二五日受理)

林一彦さんの追悼集 原稿執筆の依頼

平井一正

敬愛する林一彦先輩が三月半ばに亡くなられ、はや半年有余になります。いまも林さんが亡くなられたという実感はなく、どこからか林さんに叱られているような声が聞こえます。林さんは若いとき、夏に冬に合宿に参加され、京大山岳部をきびしく指導されました。そのきびしさは今でも話題にのぼるほどですが、このように山岳部を指導された結果、その薫陶を受けた者が後

にヒマラヤで活躍することができたと言えるでしょう。

林さんはマナスル偵察隊、サルトリカカンリ登山隊、シシャパンマ医学術登山隊などに参加され、多くの貢献をなされました。林さんは厳しさの反面、心温かなやさしいところがあり、なつかしく思い出されることばかりです。

そこでこのたび関係者があいはからい、林さんの追悼集を作ろうという話になりました。山岳会関係は私がつとめ役をさせていただきますが、下記の次第で原稿を書いていただければ幸いです。

枚数 最長でワープロA4で一枚程度、四〇〇字詰原稿用紙なら三枚半程度、少なくて結構です

締め切り 十一月末 (一周忌に間に合わせたいと思います)

送り先 メールで送っていただくのがベストですが、ファックス、郵送、いずれでも結構です。私あてにお願いします。

〒615-8063 京都市西京区

下津林六反田1-18 平井一正

電話&ファックス 075-391-5294

e-mail: khirai@mbx.kyoto-inet.or.jp

新会員自己紹介

古瀬駿介

山岳部へは、昭和三六年に入部したのですが、二回生で辞め、東京で弁護士を始め、三〇年以上もたちました。

この間、全く御無沙汰していたのですが、数年前、偶然に島田氏（ケロシン）に仕事の関係で出会い、それがきっかけで笹ヶ峰会への誘いを受け、毎年参加してました。

昨年は笹ヶ峰ヒュッテの竣工式にも出席し、今年七月には、山の仲間を連れて一泊し、近くの山を歩いてきました。まだ昔のままの自然が残っているのを知り、安心しました。

以前、山の遭難事件（木曾駒で都立航空高専の学生が雪崩で七名死亡した事件）を担当したことがあります。山登りを裁判で争うことの難しさを痛感しました。

二年前の夏には、ポコさんに連れられて、バルトロ氷河に行ってきました。氷河の左右に現れる山の姿には本当に感動しました。

何の役にも立たないのではないかと思いますが、メンバーの一員に加えて頂いた以上、何か出来ることがあればと考えています。よろしく願います。

山とローソク二題

清水節郎

はじめまして、先日AACKに入会させていただきました。新人（？）の清水です。今後とも山行に飲み会によりしくお願ひいたします。私の山岳部入部年度は昭和三五年で、故杉野弘恭君、岩瀬時郎君、阪本公一君などと同期入部なのですが、途中回り道をしたため入会が今になりました。デルファさん、ラーメンさんは高校山岳部の大先輩です。

この度は、自己紹介を兼ね私の一端を見ていただくために、いずれも古い昭和三五年のことですが、二つのローソクにまつわる話を披露させていただきます。

一 ホエプスとローソク

五月の連休に高校山岳部の現役を鹿島槍ヶ岳に連れて行った時の話です。大阪からの夜行の疲れも取れぬまま大町からバスで鹿島部落まで行き、朝食後八時過ぎに出発しました。先生二名、現役四名、OB三名の総勢九人の部隊です。同期の杉野弘恭君もOBの一人です。大谷原あたりからは、右手には雪をかぶった天狗から五竜に続く稜線が、正面には鹿島南峰、布引岳がくつきりと見えて、素晴らしい春山山行を予期させるに充分でした。大冷沢に入り正面に爺ヶ岳が大きく見えけると間もなく、正午過ぎには西俣出合に着きました。残雪はまだ

二丁三メートルもあります。

のんびりと昼飯を食ってから例によって雪固め、ブロック切り、天幕の設置をする傍ら、現役を高千穂平までのルート偵察に出し、残った者は夕食の支度です。やがて戻った偵察隊を加えて五時前には賑やかに夕食が始まりました。高津高校山岳部は、先輩によるしこきや学年間の荷重の差別がなく非常に家族的なクラブで、なおかつ料理好きの女子部員がいたこともあり、夕食は美味くて楽しいことで定評がありました。

そんな食事も済んで六時頃後片付けとなります。暖房のために天幕の中ですつと付けっぱなしであったホエプスはすっかり熱くなっていました。某君がガスを止めるために減圧弁を弛めたのですが、プスプス言つて火が消えてもなお霧状のガスが吹き出すので、減圧を急いだ彼がポンプのバルブを弛めたところ内部の高圧から開放された熱いガスリンが隙間から吹き出して一条の水のように私に注ぎかかったからあまりません。あつと言つ間に天幕の中のローソクで引火して中は火の海、入り口にいた私は火だるまになって外へ転げ落ちました。その時室内には六人いたが、出火と同時に外の者が天幕を倒して消火してくれたのと、夏用テントだったため下をくぐって逃げ出せたので、他の五人は髪の毛が焦げた程度で済んだことは不幸中の幸いであつたと思われまます。

当然のことながらこの山行は即時中止撤

退となりました。和泉さんという猛者の〇〇が、翌朝タクシーに大谷原まできてもらって予約をするために、夜七時に天幕を出発して走り続けて鹿島部落を往復し十一時にはもう戻ってきたのでびっくりしました。翌日は杉野君も一緒に三人で早朝に出発して朝一番に大町の外科医の扉をたたきました。火傷の箇所は顔面右側と右手甲ですが、雪で無意識に消したせいも、幸いにも火傷は大したことはありませんでしたが、それでも顔中包帯でぐるぐる巻きにされたので、帰る電車の中では人目について本当に恥ずかしい思いをしました。

ともあれ、現役の合宿の面倒を見るつもりで行ったのに逆に彼らにえらい迷惑をかけてしまったことを深く反省すると共に、今でも思いつく度に恥ずかしくて冷や汗がでてしまいます。当時のメンバーの皆さん本当にすみませんでした。この場を借りてお詫びいたします。(この事件以降、私個人の携帯コンロにガソリンを使ったことはありません。)

二 ラーメンとローソク

上記の悪夢がまだ残る七月に京大山岳部からラーメンさん、岩瀬時郎君、杉野弘恭君と私の四人で針の木から笠岳まで縦走した時の話です。大阪を夜行の準急「ちくま」で出発し京都でラーメンさんと合流、翌朝黒四ダム関電事務所から専用バスに便乗して距離をかせぎ、大沢出合から歩き出しま

す。針の木雪渓のアルバイトは延々と続き、結局六時間かかって峠につきました。キャンプサイトは大部分が慶応のワンゲルに占領されていたため小屋よりかなり下のじめじめした不潔な所にテントを張りました。午前中続いた雨のため木はすべて湿っており全然火が付かず夕飯はかなり遅れました。

二日目は晴れ、心も軽やかに蓮華岳を越え昼前には北葛岳到着、更に快適に七倉岳を過ぎて船窪小屋に着いたのは二時過ぎです。小屋の横にテントを張って夕食を済ませたところで小屋開きに招待され、小屋主のお嬢さん(確か福島寿子さん)から「白馬錦」を一杯とタケノコの缶詰め、アザミの味噌汁をいただきましたが、その美味かつたこと。三日目は強い風雨でやむなく沈殿。四日目は晴れ、船窪岳から不動岳、南沢岳とゆるやかな稜線を満喫しながらのんびり歩いたため、烏帽子小屋のキャンプサイトには日暮れて六時半に到着。雲海が素晴らしい、餓鬼岳や燕岳を島々のように眺めながら眠りにつきました。

五日目は昨日の反省から早起きしたつもりが出発は結局六時五〇分になってしまいました。三ツ岳の山腹を巻いて野口五郎、水晶小屋跡と前進し爺父岳には二時前に到着。この頃からガスに巻かれて広い頂上で道を見失いましたが、見当をつけて岩のゴロゴロしたところを下って行くと日本庭園とスイス庭園の中間地点に出たので、ここを今夜のキャンプサイトとします。雲の平

のど真ん中で幕営するなんて今では考えられないことです。

三時過ぎから夕食の準備にかりました。が、少し前から降り出した大雨のためまた薪が芯まで濡れていくら燃やしても燃えません。やむなくテントの中で地べたにローソクを四本立てて更に非常用の携帯燃料も着火して周囲に飯盒を三つ寝かせてその上にナベをおいて炊くことになりました。今日の献立はするめの揚げ天入りのラーメンです。低温でぐつぐつ長時間煮たために、出来上がった頃には麺はすっかり伸びるは、するめから剥がれて分離した衣はどろどろに溶けるは、で散々でしたが味は最高でした。

なおこの時のラーメンさんの風貌は、不精ヒゲを生やし、離れた眉毛は八の字、髪の毛はボサボサでいかにもラーメン屋というにふさわしいものです。「おい、ラーメン屋!」、「へい!」、「ラーメンくれ」、「あ、う、ここは山の上なんで材料がおまへんが……」、「馬鹿野郎!!」というような会話がかわされたような記憶があります。多分この頃には既にラーメンというあだ名は形成されつつあったような気がします。

又、お気づきのことと思いますが、この山行では水エブスやラジウスは全く出てきません。当時の部室の装備には何台もあつたのに何故誰も持参しなかったのか私も全然覚えていませんが、きつと薪で炊くのが本当の山男だなんて言う「美学」があつた

のかも知れませんが。あるいは鹿島槍のことが脳裏にある私が敬遠したのかも知れませんが。現代では、非常に小さくて軽いコンロが低価格で何種類も市販されているのを見るに付け本当に隔世の感がします。

六日目も朝から雨でしたが、雲の平散策のあと爺父沢源流から三俣蓮華小屋でしばし雨宿り。この小屋はうす汚くて旅情が全く感じられません。小屋から一旦登ってしばらく下ると双六小屋に二時半到着。先程の小屋とは対照的に紫の屋根の映える二階建てのきれいな小屋でした。七日目も雨で一日中沈殿。夜八時頃救助を求めるCALLが遠くから聞こえたので、旧道と新道と二手に分かれて大沼乗越へ向かいました。結局遭難者が見つかって小屋へ帰り着いたのは深夜の一時一五分です。雨とガスの中を道に迷ったようです。

八日目は、やはり雨模様の中を双六小屋から抜戸下を通って笠ヶ岳山荘で一泊し、久しぶりに暖かい小屋でおいしい小屋食をいただきました。翌九日目は最終日、笠ヶ岳からいよいよ下山です。山麓の蒲田川荘でゆっくり温泉につかって汗を流したあと、笠ヶ岳山荘でSDDの人から速達を頼まれていたので神岡回りで高山駅へ出て投函し、既に列車がなくなっていたので塩瀬先輩宅で一晩お世話になりました。(その節は塩瀬先輩の留守中に勝手にお世話になり、有難うございました。)翌日はせっかく来たからという訳でゆっくり高山見物をして、大阪

へ無事帰り着いたのは十日目の夕方五時頃でした。

以上駆け足で四〇年昔の山行文を綴りましたが、これを以って自己紹介に代えさせていただきます。今後ともよろしくお願ひいたします。

(九月一四日受理)

訃報

本日、村山弘治会員の訃報が入りました。昨年より病氣療養中のところ、八月二〇日夕刻逝去されました。

喪主は、奥様 村山直美さんです

編集記

この何年か関東に在住している会員が集まり、関東グループ登山を年に数回行っていきます。この夏には笹ヶ峰ヒュッテに集まり、そこから八月四日に岩瀬、清水、沖津の三名で天狗・金山を目指しました。乙女山峠を少し下った標高千メートル前後の地点から登り始める登山道はおおむね整備もよく、まずまずの天候にも恵まれ快適な登りでした。途中で出会った地元の方の話では、その方の所属してられる建設会社が、登山道を毎年整備しているそうです。

しかし頂上近くから雲行きが怪しくなり、

ついに雷鳴が轟くほどの状況では無理は許されず、金山を目前にして天狗が原を越えた地点で退却しました。帰路は雷鳴と夕立に追い立てられ、ぬかるんだ急斜面を駆け下りたのですが、山岳部時代ならよくあった山行のパターンです。

ところが翌日から激しい筋肉痛に見舞われ、少なくとも一週間以上も歩行に難渋しました。さらにそれだけではなく、両膝を傷め鍼灸師に治療を受けているけれども、今なを完治していません。

日頃のトレーニング不足というよりも、自分がそのような肉体年齢になっていることを認識すべき現象なのでしょう。連載中の「教育的登山論」を読者の皆様に読んでいただき、安全な登山のためにぜひ役だてて欲しいと思います。

なお笹ヶ峰ヒュッテでの夏休みはずばらしい体験でした。岳友と久しぶりに再会し、深夜まで歌を唱い学生時代に回帰したような気分を味わうことができたのです。

沖津文雄

編集委員 沖津文雄、吹田啓一郎、竹田晋也

発行日 二〇〇〇年十月二〇日

発行所 京都大学学芸部

京都市左京区吉田本町

京都大学工学部建築系

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一 八

(株)土倉事務所